

# メトニミー再考

## Metonymy Reconsidered

仲本 康一郎\*

Koichiro NAKAMOTO

認知言語学以前の言語学では、言語は社会的な規約に基づく記号であるとするソシュールの記号観や、言語の文法は他の認知機構と切り離された自律的なシステムであるというチョムスキーの文法観が支配的であった。これに対して、認知言語学では、言語は人間の身体的な経験に動機づけられた現象であるとし、従来までのいわば閉鎖系としての言語観を乗り越える新しい言語研究、特に意味研究の可能性を切り開いてきた。

しかし、認知言語学による研究が進展するなか、何がどこまで解明されているのか、また個別に提案される見解が相互にどう関連するのか等、全体像が見えにくくなっている部分もあることも確かである。このような現状に鑑み、本研究では認知言語学の代表的な領域における見解を整理することを目標とする。具体的には、カテゴリー化、メタファー、メトニミー、イメージ図式、構文とフレーム、言語の主体性という分野を考えており、今回はその初回としてメトニミーを取り上げる。

### 第1回 メトニミー再考

#### 1. はじめに

メトニミー（換喩）とは、二つのものや概念の近接性や関連性に基づき、一方のものや概念を用いてもう一方のものや概念を表わす比喩的表現である。ここでいう二つのものは、実世界の事物や事象を指す場合もあれば、概念的な関連性や言語的な共起関係等を指す場合もある。例えば、「鍋が煮える」のように鍋で中の具を指すというメトニミーの場合、二つの事物は物理的に近い距離にあり、さらに容器（鍋）と中身（具）という二つの概念は連想によって関連づけられている。

本稿では、まずメトニミーの研究史を概観し、記述的な意味研究から現代の認知言語学のメトニミー論に至る発展の経緯をたどる。次に、認知言語学の観点から、メトニミーの経験的基盤を問い直し、個別に提案されてきた換喩リンクを意味拡張の方向性という観点から整理する。最後に、メトニミーの言語使用上の背景として、知覚の反映による短絡的表現と、概念化に基づくカテゴリー化という二つの見解を検討し、最後に語用論の分野におけるメトニミー研究の動向を示す。

#### 2. メトニミー研究史

メトニミーの研究は、直線的に進展してきたというよりも、その正確な定義を求めて模索的に発展してきたと言える。メトニミー現象を通時的な意味変化の問題として記述した初期の研究以降も、メトニミーの主要な機能は指示の転移であるとする Nunberg (1978) や、概念化あるいはカテゴリー化のひとつであるとする Lakoff and Johnson (1980) 等、幅広い研究が現れている。また、認知言語学の内部でも参照点構造と領域焦点化という異なる考察が行われている。

以下、こういったメトニミー研究の歴史的な推移を概観する。

---

\* 山梨大学留学生センター准教授（教育人間科学部国語教育講座兼任）

## 2. 1. メトニミー研究 前史

ソシュール以降の言語学では、共時態と通時態の違いが重視されてきた。この違いを意味研究に導入し、共時的な意味分野の研究を行ったのが、意味場の理論とそこから発展した成分分析に基づく意味論研究であり、これに対して通時的な歴史的変化を考察したのが Stern (1931) と Ullman (1959) に代表される意味変化の研究である。これらの研究では、語の意味変化を説明する手段として、類推 (analogy) や転移 (transfer) 等、現在のメトニミー論を先取りする概念が用いられている。

具体的には、容器で中身を (例. *barrel* : 樽→酒)、材料で製品を (例. *copper* : 銅→金)、衣服で人物を (例. *blue-coat* : 青服→巡查)、場所で行為を (例. *school* : 学校→授業)、人物で成果を (例. *a Shakespeare* : 作家→作品) といった語の意味変化の事例が挙げられている。また、形容詞・副詞の *fast* が「力強い」から「はやく」へと、動詞の *want* が「欠乏」から「欲求」へと変化したといった、現代の認知言語学の観点からも興味深い事例が報告されている。

Stern や Ullman はこういった意味変化を引き起こすのは、歴史的、社会的要因だけでなく、発話者の指示物に対する心理的態度の変化であると指摘しており、共感覚表現や転移修飾語の分析等も含め、現代の認知的な研究を先取りする見解を示している。しかし、これらの研究は、メトニミーの記述的な類型の考察に終始するもので、その背後にある経験的基盤や拡張の方向性、メトニミーの理解や産出を可能にする認知モデル等への言及は当然ながら見られない。

一方、Jakobson (1956) は、メトニミーを認知的な観点から基礎づけた最初の研究として注目される。この論文は失語症研究の先駆けとなるもので、そこで Jakobson は失語症の患者を大きくパラディグマティックな選択力が欠如した者とシングマティックな結合力の欠如した者に分類している。前者では全般に語彙選択の能力が低下し、後者では文構築の能力が低下する。これらの類型は、現代の用語で言えば、ウェルニック失語とブローカ失語にほぼ相当する。

これらの失語症者は、語彙選択においてそれぞれ類似性異常 (similarity disorder) と近接性異常 (contiguity disorder) という性質を示し、そういった異常を補完するために異なる方略を用いるとされる。言語使用の観点から言えば、類似性異常の失語症者は自己の語彙欠損を補うために、ことばの結合軸を利用したメトニミーを多く用い、近接性異常の失語症者はことばの選択軸を利用したメタファーを多用するという特徴がある。

例えば、前者の類似性異常の患者は、*knife* の代わりに *fork*、*lamp* の代わりに *table*、*pipe* の代わりに *smoke* といった概念を用いる。これらは実世界においても共在し、また *knife and fork* や *smoke a pipe* といったかたちで言語的にも共起する。このように Jakobson は、失語症者の言語使用の観察からメトニミー現象に着目し、メトニミーを概念上、または表現上の共起制約として考察することで、現在の使用頻度を重視する用法基盤主義に通じる視点を提出している。

## 2. 2. 指示の転移とメトニミー

次に、現代言語学において、語用論的観点からメトニミー現象に注目したのが Nunberg (1978) である。Nunberg によれば、メトニミーの主要な機能は指示機能 (referential function) にある。例えば、Nunberg が採取した有名な事例 *The ham sandwich is waiting for his check.* (ハムサンドが勘定を待っている) において、「ハムサンド (ham sandwich)」は食べ物ではなく、それを注文した食事客を間接的に指示するために用いられている。

このように日常言語において、発話者は直接に指示対象を言及せずとも、アドホック (ad-hoc) にそれに代替する表現を用いることで間接的な指示を達成する。このように Nunberg はメトニミーを指示の転移 (referential transfer) の問題とし、次のような語用論的関数 (同定原則) として定式化している (Nunberg 1979: 52, Fauconnier 1985: 14)。このとき二つの対象は発話の場面や文化的な知識を介

して語用論的に結びつけられている。

(1) 同定原則 (identity principle)

もし二つの対象  $a$  と  $b$  が語用論的関数  $F$  ( $b = F(a)$ ) によって結合されるならば、 $a$  の記述  $b$  を用いて  $a$  の対応物  $b$  を同定できる

例えば、*Plato is on the top shelf.* という文を考えてみよう。この文において、主語 *Plato* は哲学者としてのプラトンではなく、彼の著した書物を指している。これを語用論的関数で示すと、もともとの著者から作品へという次のような関数として表現される。

(2) *Plato is on the top shelf.*



Figure 1. 語用論的関数：作品 =  $F$  (著者)

その後、このような関数は従来からの伝統的な意味拡張の研究も取り込み、認知言語学のなかで換喩リンクとして提案されていくことになる。ただし、このようにメトニミーを指示の転移の問題として規定するとき、私たちはなぜわざわざこういった間接的な表現を用いるのかという動機づけは不問にされる。こういったメトニミー使用の認知的な動機づけを考察する道を切り開いたのが、後述する Lakoff and Johnson (1980) によるメトニミー論である。

### 2. 3. 参照点構造と認知的際立ち

Langacker (1993) は、メトニミー表現を参照点能力 (reference point ability) の反映として分析している。参照点能力とは、主体がある目標物 (target) に注意を向けるとき、直接その目標物に接近 (access) が困難である場合、まず注意を向けやすい参照点 (reference) にアクセスし、参照点を介して最終的に目標物に注意を向けるという間接的な認知の方略であり、探索活動を背景にした知覚の方略をモデル化したものである。参照点構造は次のように図示される。

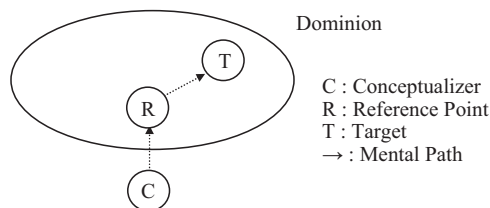


Figure 2. Reference point Construction (Langacker 1999:174)

これは、ある場所にいる概念化者 ( $C$ ) が目標物 ( $T$ ) の位置を知るために、参照点 ( $R$ ) との関係でその位置を定位することをモデル化したものである。例えば、「机の上の本」という表現において、本の在り処は机という参照点にアクセスすることで、その周辺の領域が探索領域 (dominion) となり、その上下や左右、前後といった空間にアクセスできるようになる。メトニミーの場合も、指示物に直接アクセスする代わりに、参照点を介して目標物に到達するという参照点構造が利用される。

例えば、「鍋が煮える」という場合、鍋を参照点にして目標物である鍋の中の料理へとメンタルパスが導かれる。ここで重要なのは、いかに適切な参照点を選択し、聞き手の注意を指示物に導くかであり、そこで利用されるのが認知的際立ち (cognitive salience) という概念である。認知的際立ちとは、簡単に言えば、知覚的に目立つものが参照点として選択されやすいという現象をさす (Langacker

1993: 199)。

例えば、鍋でその中の具を指す「鍋が煮える」のように、〈見えやすいものが見えにくいものよりも際立つ〉(VISIBLE>INVISIBLE)という性質がある。また、漱石でその作品を指す「漱石を読む」のように、〈人間が人間でないものよりも際立つ〉(HUMAN>NON-HUMAN)という性質が利用されることもある。さらに、永田町で国会を指す「永田町、大混乱」のように、〈具体的なものが抽象的なものよりも際立つ〉という性質もある (CONCRETE>ABSTRACT)。

## 2. 4. メトニミーと換喩リンク

以上のメトニミー解釈では、メトニミーの主要な機能は指示や同定にあるとされてきたが、こういった見解とは全く異なるメトニミー観を提案したのが Lakoff and Johnson (1980) である。Lakoff and Johnson (1980) は、メトニミーの分析にあたり、まずメトニミーは無秩序な現象ではなく、概念的な連想に基づく特定の方向性を持つとし、次のような多様な換喩リンク (metonymy links) を提案している。

### (3) Examples of metonymy link

- |                              |                                      |
|------------------------------|--------------------------------------|
| a. THE PART FOR THE WHOLE    | e.g. We don't hire long hair.        |
| b. PRODUCER FOR PRODUCT      | e.g. He bought a Ford.               |
| c. OBJECT USED FOR USER      | e.g. The sax has flu today.          |
| d. CONTROLLER FOR CONTROLLED | e.g. Nixon bombed Hanoi.             |
| e. THE PLACE FOR THE EVENT   | e.g. Watergate changed our politics. |

こういった換喩リンクは、概念メタファーと同様、日常的な経験的基盤に基づく。例えば、特定の場所と出来事は現実の場面として体験されており、生産者と生産物の関係等は (物理的な) 因果関係に基づくものとして概念的に結びついている。

また、Lakoff and Johnson (1980) のもうひとつの重要な指摘として、メトニミーという言語現象の持つ機能を指示機能に限定するのではなく、メタファーと同様に、外界を異なる観点によって意味づけていく概念化の機能を持つと主張している。

以下は、そういった主張の当該の箇所である (Lakoff and Johnson 1980:36)。

### (4) metonymy is an understanding-device

[...] metonymy is not merely a referential device. It also serves the function of providing understanding.

For example, in the case of metonymy THE PART FOR THE WHOLE there are many parts that can stand for the whole. Which part we pick out determines which aspect of the whole we are focusing on.

例えば、英語で人間を数える場合、*body*、*head*、*face* のように多様な身体部位が換喩的に利用される。これらはどれも最終的に人間を指すが、焦点化される人間の側面はどの身体部位を選択するかで異なる。下記の事例を見てみると、*body* という場合は人間の身体的な能力が焦点化されており、*head* という場合は知性的な側面が、そして *face* という場合は社会的な関係に注意が向けられていることがわかる。

- (5) a. We need a couple of *strong bodies* for our team.  
 b. There are a lot of *good heads* in the university.  
 c. We need *new faces* around here. (Croft 1993: 181)

同様に以下の表現でも、その身体部位に言及することで、換喩的に人物の多様な能力に注意が誘導されている。*head* は人間の知性について、*legs* は走行の能力について、*eyes* は視覚的な能力を表わす (Barcelona 2003: 265)。

- (6) a. John has a *good head*. (INTELLIGENCE)



b. John has good *legs*.

(RUNNING CAPACITY)

c. John has good *eyes*.

(SHARPNESS OF VISION)

このような場合、メトニミーで表わされる対象は恣意的に用いられているというよりも、積極的に選択されており、カテゴリー化のひとつとみなすことができる。私たちはメトニミーを用いずに表現できるところを、わざわざこういった身体部位のカテゴリーを用いているわけであり、そこにはどの側面に焦点をあてて人間を捉えるかというカテゴリー化（あるいは概念化）の動機づけが働いていると言える。

## 2. 5. 領域焦点化とメトニミー

従来のメトニミー解釈では、まずデフォルトの指示対象が規定され、そこからメンタルパスや語用論的推論によって目標の対象物が間接的に同定されるという前提があった。これに対して、Croft (1995) はフレームという観点でメトニミー現象を分析し、指示対象は直接に同定されるという見解をとっている。このような観点から Croft は、メトニミーは同一領域内の要素または領域そのものの焦点化 (domain highlighting) として適切に分析されると述べている。

例えば、指示の曖昧性の代表的事例として、「電話 (→受話器) をとる」「自転車 (→ペダル) をこぐ」「扇風機 (→はね) が回る」といった表現がある。これらは全体から部分へという換喩リンクに基づくメトニミーであり、Croft による領域焦点化の観点から適切に説明される。まず目的語から電話や自転車、扇風機等の全体構造がフレームとして活性化され、次にそのような構造＝領域のなかで動詞の意味と両立する部分＝要素が焦点化されることで理解が達成される。

同様の観点から、国広 (1997) は、辞書記述は多面的な観点から行なわれるべきであるとし、そのひとつの事例として「台所」という表現の多様な解釈の可能性を挙げている。国広によれば、「台所」という語は料理のフレームを活性化するという。このことにより、「台所を手伝う」という場合は料理人が、「台所を任せる」という場合は調理作業が、さらに、「台所が苦しい」となると調理にかかる経済的な費用といったかたちで多面的な指示が可能になると述べている (国広 1997: 72)。

つまり、「台所」という表現が料理という場面＝料理フレームを喚起するトリガーとして働き、そのようなフレームのなかで、料理人や調理作業、調理道具、さらに料理にかかる費用等、料理に関わる多様な要素が指示されるわけである。国広は、このような言語現象を多面的多義と呼び、その他にも「学校」「病院」「銀行」といった概念が、建物や組織、そこで営まれる活動等、多様な現象の集合として分析されると指摘している。

このようにあらゆる言語の概念は多面的であることを認めると、メトニミー現象もそういった多面的な概念における領域焦点化として分析される。極端な場合で言えば、*Proust is tough to read.* のような表現を解釈する際も、*Proust* はもともと作者と作品の両方を指示できる両義的な概念であるという前提で、この場合は読書の領域が活性化されており、作品として解釈されるというように分析される (Croft 1993: 178) <sup>1</sup>。

次に、こういった認知言語学の観点からメトニミーの経験的基盤を再考する。

## 3. メトニミーの経験的基盤

言語を超えてメトニミー (換喩リンク) には多様な類型が存在する。瀬戸 (1997: 123) によれば、現在までに提案されてきたメトニミーは、大きく事物間の関係と事象間の関係に分類される。ここでは、瀬戸の分類を参考に、それらの換喩リンクを支える経験的基盤と、そこに観察される意味拡張の方向性を議論する。具体的には、それぞれ事物間の関係として所有関係と責任関係を、事象間の関係として同時関係と継起関係を取り上げる。

### 3. 1. 事物間の関係：所有関係と責任関係

まず、事物間の関係 (entity metonymy) はどのような経験的基盤を持つであろうか。一般に二つのモノが物理的に近い関係を持つ場合、そこでは知覚上の空間的距離が問題にされる。しかし、具体的な換喩リンクのうち、そういった物理的距離に基づくメトニミーは実は少なく、それよりも連想を介した概念的距離に基づくメトニミーのほうが一般的である。ここでは所有と責任という二つの概念を介した換喩リンクを検討し、そこで働く概念的な連想関係を指摘する。

#### 3. 1. 1. 所有物から所有者へ

まず、所有物から所有者へ (POSSESSED TO POSSESSOR) という換喩リンクについて考えてみよう。「赤頭巾」や「青ひげ」といった表現は、そういった服装をした人物や身体的な特徴を持った人物をさす。このとき、服装や身体的な特徴は、人物を同定するための指標として機能しており、そこには所有者から所有物へという方向性が成り立っている。

以下は、そういった所有物で所有者を表わす換喩リンクである (Lakoff and Johnson 1980: 57)。

##### (7) BODY PART FOR PEOPLE

- a. We don't hire *longhairs*.
- b. We need *new faces* around here.

##### (8) CLOTHES FOR PEOPLE

- a. Mrs. Grundy frowns on *blue Jeans*.
- b. Little *Red Riding Hood* (赤頭巾ちゃん)

##### (9) OBJECT USED FOR USER

- a. The *sax* has the flu today.
- b. We need a better *glove* at the third base.

これらの表現は、実世界における身体的な経験によって支えられたメトニミーと考えていいだろう。ただし、ここで用いられている所有の概念は、実世界における物理的な距離を直接的に反映するものではなく、概念的な距離として認識されるべきものと考えられる。例えば、その傍証となるのが、言語類型論等で文法性を決定する重要な要因として注目される分離可能性 (alienability) という概念である (角田 1992: 119)。

一般に、所有物の概念は、典型性に基づくカテゴリーをなし、所有物らしさは身体>属性>服装>親族>ペット>作品という順序をなすという。角田は、こういった連続体を「所有傾斜性 (alienability cline)」と呼び、多様な文法現象の分析に成功している。例えば、「～している」という形式を考えてみよう。「～している」は、次のように身体や服装、属性等、典型的な所有物だけに可能で、親族やペット等とは共起しない。

- (10) a. 大きな体格をしている
- b. 優しい性格をしている
- c. 洒落た服装をしている
- Cf. ? {赤いバッグ、かわいい弟、小さな金魚} をしている

こういった連続体は、所有物のメトニミーにもあてはまり、身体 (例. のっぽ)<sup>2</sup>や属性 (例. がり勉)<sup>3</sup>、服装 (例. 赤頭巾) といった換喩は多いが、親族やペット、作品を利用したメトニミーは考えにくいことに現れている。

同様の傾向は、次のように英語の場合にも観察される。

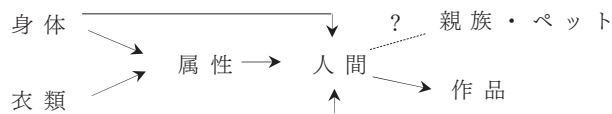
- (11) a. Get your *butt* over here! (Lakoff and Johnson 1980: 57)
- b. We need a new *glove* to play third base. (Kövesces 2000: 146)

c. She married *power/money*.

(Kövesces 2000: 155)

このように一般に、所有者から分離できる所有物はメトニミーとして用いにくい。(また、作品の場合、反対に人間で作品を表わすという方向性のほうが自然である)。つまり、所有を介したメトニミーは、こういった概念的な距離に基づき規定されている可能性が高く、物理的な近接性と関連はあるものの、基本的に〈分離可能性〉といった概念的な距離に基づくメトニミーと言える<sup>4</sup>。また以上の考察を考慮すると、次のようなメトニミーの拡張方向性を議論することが可能となる。

## (12) メトニミーの拡張方向性 I



これらの所有の概念に基づくメトニミーは、最終的には人間を指示するために用いられている。つまり、これらの拡張可能性は、私たちがメトニミーを自己や他者をカテゴリー化する概念化の方略として用いている可能性を示唆するものと言える。

## 3. 1. 2. 管理者から当事者へ

次に、管理者から当事者へ (CONTROLLER TO CONTROLLED) という換喩リンクについて考えてみよう。例えば、*Nixon bombed Hanoi.* という文において、実際に爆撃をした当事者は戦闘員であるが、言語表現上は、組織の統括者である大統領 *Nixon* がその行為を遂行したことになる。この場合、二つの対象物は空間的な距離 (あるいは所有概念) ではなく、統括あるいは責任という概念的な距離を介してつながっている。以下は、そういった責任という概念を介したメトニミー表現である。

## (13) CONTROLLER FOR CONTROLLED

- a. *Nixon bombed Hanoi.*
- b. *Ozawa gave a terrible concert last night.*

## (14) INSTITUTION FOR PEOPLE RESPONSIBLE

- a. *Exxon has raised its price again.*
- b. *The army wants to reinstitute the draft.*

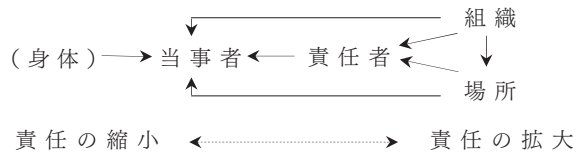
## (15) THE PLACE FOR THE INSTITUTION

- a. *The Whitehouse isn't saying anything.*
- b. *Hollywood isn't what it used to be.*

これらのメトニミー現象は、行為の責任をどこまで広げるかというスコープの問題にあたる<sup>5</sup>。ここで注意したいのは、こういったスコープの拡大と縮小は恣意的な現象ではなく、私たちが生きる社会の構図を反映するものであるという点である。ある企業や組織で働く従業員が不始末を起こした場合、一般に、社会はその責任を当事者ではなくそれらを管理すべき責任者や企業に向ける。ここで見た換喩リンクの背景にはこういった社会の構図がある<sup>6</sup>。

以上観察したことを一般化すると、所有の場合と同様に、責任や影響という概念を介した次のような拡張の方向性を議論することができる。

(16) メトニミーの拡張方向性Ⅱ



この場合も、責任に基づくメトニミーはすべて、当事者へと向けられているという点で先に見た所有の場合とよく似た拡張の方向性を持っていると言える。所有の場合、人物を特定化するためにメトニミーが用いられていたように、この場合は、名も知れぬ当事者や責任者に言及する代わりに、それらを包含する組織や場所等、周知された名称が利用されている。メタファーと同様に、こういった拡張の方向性が議論されることは今後のメトニミー研究の課題の一つと言えるだろう。

3. 2. 事象間の関係：同時関係と継起関係

以上、事物間のメトニミーとして、所有関係と責任関係について概観した。次に、事象間の関係に基づくメトニミー現象 (event metonymy) について考察したい。一般に、行為や出来事等の事象は、同時関係や順序関係といった時間的な位置関係として構造化される。ここでは、時間的近接によって動機づけられた代表的な換喩リンクとして、同時関係に基づく換喩と、継起関係に基づく換喩の二つの現象を支える経験的基盤について考察する。

3. 2. 1. 同時関係に基づく換喩

行為や出来事は実はさまざまな現象が並列的に生じている複雑な現象である。例えば、たき火という出来事を考えてみると、そこには火が燃えるという出来事以外に、パチパチと鳴るたき木の音、立上るけむりのにおい等、さまざまな付随的な現象が伴うことに気づく。ただ、それらを言語化する際、私たちはその一部に注意を向けて表現する。ここではこういった事象間に成り立つ同時関係を利用したメトニミーについて考えてみよう。

行為や出来事は外界に何らかの音を伴う。次の例では *stomp* や *rumble* といった動詞が音声を伴う移動として理解されており、移動という出来事はそれらの音によって換喩的に表現されている<sup>7</sup>。

(17) 事象音 → 移動：移動は音声を随伴する

- a. The trolley *rumbled* through the tunnel.
- b. The wagon *creaked* down the road.
- c. The bullet *whistled* past the house. (Goldberg and Jackendoff 2004)

同様に、発話という行為は何らかの動作を伴う。次の例では *giggle* や *squeak* といった動詞が発話に伴う動作として理解されており、発話という行為はそれらの動作によって換喩的に表現されている。

(18) 言語音 → 動作：発話は動作を随伴する

- a. "Oh, dear," she *giggled*, "I'd quite forgotten." (Goossens 1990)
- b. Annabel *squeaked*, "Why can't you stay with us?" (Levin et al. 1997)
- c. "Good bye," Alice sadly *waved her hand*.

日本語でもこれと類似の現象として次のような事例が指摘されている。この場合も、引用動詞が発話と同時にされる行動で置き換えられている。

(19) a. 誠が「おはよう」と入ってきた

b. ごめん下さいと戸が開いた

c. 「いらっしゃいませ」と水が置かれた (藤田 2000: 77)



このような事象の同時関係に基づくメトニミーは、実世界における時空間の接近ということと同時に、移動は音声を随伴する、発話は動作を伴うといった知識を利用しているとも考えられ、概念的な距離を利用したメトニミーということになる。

### 3. 2. 2. 継起関係に基づく換喩

外界の出来事が複雑であるのと同様に、人間の行為も単純ではない。人間の行為は、一般に順序構造をなし、系列的な行動連鎖として分析される。例えば、電話をかけるという行為は、受話器をとる、ダイヤルを回す、電話に出る、会話をする、受話器を置くというように、下位の動作の連鎖として構造化されていることに気づく。ここではこういった行動系列に関する知識を利用したメトニミーについて観察する。例えば、以下の慣用句は、こういった行動の連鎖を介して理解される。

- (20) a. 筆をとる (筆記：開始) 筆を置く (筆記：終了)
- b. 口を開く (会話：開始) 口を閉じる (会話：中断)
- c. 刀を抜く (決闘：開始) 刀を納める (決闘：終了)

(山梨 1988、楠見 1995、初山 1997 を参照)

これらの表現は、ある行為系列のなかの目立つ動作に言及することで、全体的な行為の局面を表わす<sup>89</sup>。例えば、「筆をとる」ことで筆記の開始が、「筆を置く」ことで筆記の中断や終了が表わされる。また、これらの動作は視点の位置を伝えるという興味深い効果も持っている。例えば、「口を開く」ことは話し手にとっての会話の開始を表わすのに対して、「耳を傾ける」は同じ会話の開始でも聞き手から見た行為として概念化されている。

また、これと関連する現象として、組織への移動や訪問に言及することで、その場所で典型的に行なわれる行為が含意される場合がある。例えば、*go to school* は「勉強する」ことを、*go to hospital* は「治療する」ことを、*go to prison* は「服役する」ことを意味する。また同様に、*at one's desk* は「勉強する」ことを、*at one's books* は「読書する」ことを表わす等、ある人工物のそばにいてそれぞれに行為に従事することが含意されるという場合もある。

ここで見た事象間の継起関係に基づくメトニミーは、明らかにスクリプトに代表される知識構造にアクセスすることで成立する現象であり、概念間の距離として一般化できる現象ということになる。最後に、原因と結果の関係として分類されることの多い感情表現について見ておこう、

### 3. 2. 3. 心の理論：意図や感情はどこにあるか

さて、ここまでで見た事象間の換喩リンクは、すべて目に見える動作から目に見えない意図を理解するという構造を持っている。これは、人間が他者を意図を持った存在とみなし、「心の理論 (theory of mind)」を用いて、動作から意図や目標を知覚できることに起因する (子安 2000 等)。これと同様に、人間の感情も実際は直接に観察することはできないため、感情表現も身体的な反応によって間接的に表現される傾向がある。

例えば、日本語の表現をみても「頭を抱える」「肩を落とす」「首を傾げる」「真青になる」「溜息をつく」「目をつぶる」といった多様な身体的動作によって人間の感情が表わされる (Cf. Kövecses 2000)。このような慣用句は文学作品だけでなく、マンガの表現に効果的に用いられる。例えば、登場人物たちは、実際に悲しみに肩を落とし、歯を食いしばって我慢し、恥ずかしさに赤面する<sup>10</sup>。またマンガでは実際の現象ではありえないような、驚いて目玉が飛び出すといった大袈裟な表現も多用される。

このような感情表現を体系的に捉えた興味深い論考として Matsuki (1995) の怒りの分析がある。Matsuki は日本語の怒りの表現では基本的に怒りはハラからムネへ、そして最後にアタマにくるというシナリオがあると述べている<sup>11</sup>。最初は、「肚に据える」「肚に納める」のように我慢ができる段階に

あるが、次に「ムカムカする」「胸糞が悪い」のように自制がきかなくなった段階に達し、最後に「アタマにきて」爆発するという。

以下は、怒りの推移を図式化したものである (Palmer 1996: 228)。

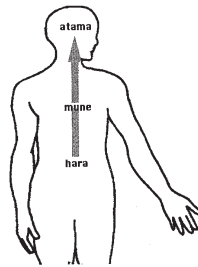


Figure 3. 怒りは身体＝容器内を上昇する

ここで見た動作から感情へという換喩リンクも、(もともとは実世界における人間の行動を観察することで生まれたものであるが)、言語理解という観点に立った場合、それは動作と感情に関する知識を利用した言語現象ということになろう。またこれらの表現は慣習的であり、文化的な発想につよく影響を受けている。その意味でも、これらの現象は文化的な知識やモデルに依存した現象であり、概念的距離に基づくものとして規定すべき現象であると考えられる。

#### 4. メトニミーと言語伝達

以上、メトニミーの経験的基盤、及び意味拡張の方向性を検討してきた。しかし、そもそも私たちはなぜメトニミーを用いるのだろうか。ここではメトニミーを、ある事物を指示するときの知覚上のアクセス可能性を利用した短絡的指示であるとする見解と、そうではなく、ここまでで唆されてきたように、メタファーと同様に私たちの積極的なカテゴリー化の反映であるとする二つの見解について検討し、最後に語用論から見たメタファー現象について議論する。

##### 4. 1. 知覚の反映としてのメトニミー

哲学にはギャバガイ問題というアポリアがある。これは文法書や辞書を持たずに言語学者が現地へ赴き、初めて現地人から現地語で Gavagai! というのを聞いても、それが何を指示しているのか、また指示された対象のどの部分を指しているのかわからないであろうとする問題である (Quine 1963)。このことは私たちが場面や状況の了解なしに、指示対象を同定することが困難であることを象徴的に示している。ここではこういった場面の知覚とメトニミーの関係について考えてみたい。

##### 4. 1. 1. メトニミーと状況依存性

言語は場面や状況の理解と密接に結びついている。例えば、先に見た「台所」や「学校」といった概念は、それぞれの場면을喚起する語として働く。これと同様のことは、指示をともなうメトニミー現象においても観察される。例えば、メトニミーとして最も有名な例文である *The ham sandwich is waiting for his check.* (ハムサンドが勘定を待ってるぞ) といった表現が成立するときも、特定の場面が共有されている。

この場合、「ハムサンド」は、食事ではなくそれを注文した客を指示しているが、おそらくこの表現を使った給仕は、名も知らぬ客を同定するほぼ唯一の手段として、客が食べた食事に言及せざるを得なかったであろう。ここで利用されているのは、語彙や文法の知識ではなく発話の場面であり、こ

の場合、レストランという場面の理解があつて初めてこの文の了解が可能となる。このようなメトニミー現象は慣用的な換喩リンクと異なり、状況に依存したアドホックな言語現象といえる<sup>12</sup>。

この場合、〈食事から人間へ〉というメトニミーは換喩リンクで結ばれているというよりも、実際の場面の支えによって解釈が可能となっている。他にも、「鍋が煮えている」のような容器と中身の換喩リンクとして分析されてきた表現も、実際に用いられる場面を考慮するならば、これらは概念的な結びつきによって可能となったものというよりも、実世界の状況の支えにより、物理的な距離を利用したアドホックな言語使用の産物とみなすほうが適切であることに気づく。

これらの発話において発話者は眼前の事態を手取り早く伝えるためにあえて厳密な指示をせず、目立つ対象に言及しただけであると考えられることもできるわけである。会話の参加者の間で共同注意 (joint attention) が成り立つ最も手近な対象が眼前のなべであった、と考えるほうが自然であり、反対に中身で容器を表わす「スープを弱めて」や「カレーを消して」という発話でも、この場合アクセスできるのが容器よりも中身であったと説明することできる (瀬戸 1997: 142、谷口 2003: 134)。

この例ではスープやカレーを作っているという状況が会話参加者に共有されており、そういった共有知識を参照し理解が成立している。このように参照される事物は視覚的な対象だけでなく、会話の参加者の共有知識である場合もある。これらはすべて指示という現象を成立させるための発話の資源といえる。このように考えると、ことばの意味を言語そのもののへと帰属するのではなく、共有された環境に分散させるといった分析も可能となるものと考えられる<sup>13</sup>。

#### 4. 1. 2. メトニミーの文学的効果

こういった状況依存性に基づくメトニミー表現は、文学的な効果として高められる場合がある。次の文は太平洋戦争を描いた作品のなかで、日本軍が連合軍と出会う直前、夜の森で主人公が敵陣を眺めているという場面である。このときに闇の中に見える煙草の火は、煙草を吸っている人間を指示している。ここで注意したいのは、このときに主人公の目に見えているのは、相手の姿ではなく、本当に煙草の火だけであるという点である。

(21) 闇の中の煙草の火はおどろいたように立ち上がりました。(竹山道雄「ビルマの堅琴」)

このような場合、メトニミーは比喩であるというよりも、眼前の事態をそのまま言語化した結果生じた自然な表現に過ぎないということになる。逆説的であるが、こういった主人公にとっての見えを利用することで、読者にはよりリアルにその状況が体感されるという文学的な効果が生み出されている。同様に、「春雨やものがたり行く傘と蓑」という有名な蕪村の俳句でも、遠方からの見えを示すことで、遠景としての風景がリアルに描写されている。

また演劇や映画、文学のなかで多用される表現として、原因と結果に基づくメトニミーがある。例えば、シェークスピアの「オセロー」では、主人公オセローが妻の不貞をハンカチの不在によって断罪するという場面がある (樋口 1995: 40)。また、安寿と厨子王の物語では、沼の端に置かれた履物によって、安寿の死が暗示される。このように行為や出来事の徴候や痕跡によって出来事が間接的に描写されるということもある。

(22) […] 山椒大夫一家の討手が、この坂の下沼の端で、小さい藁履を一足拾った。それは安寿の履であった。(森鷗外「山椒大夫」)

同様の現象は、しばしばメトニミーと混同されるシネクドキ (提喩) の場合にもあてはまる。以下で見るシネクドキでは上位語から下位語へという提喩リンクが利用されている。この場合、読者はすでに「大きな黒いもの」の正体がなめとこ山の熊たちであることを知っている。これはちょうど映画の終盤で遠景を見せていくように、死んだ主人公小十郎を優しくとりまく熊たちを、カメラを引いて遠方から捉え直したものといえるだろう。

- (23) ほんとうにそれら大きな黒いものは、参の星が天の真ん中に来て、もっと西へ傾いてもじっと化石したように動かなかった。(宮沢賢治「なめとこ山の熊」)

このようにメトニミーが利用される実際の事例を見ていくと、メトニミーは、概念的な近接性や修辭的な技巧である以前に、発話者の知覚の直接的な反映であることがわかる。こういった見直しは、メトニミー現象を修辭的な原理とともに、知覚的な見えの反映という観点から捉え直していく試みとも通じる。ただ現時点では、このような状況的認知の観点からの研究はほとんど見られない。今後の研究が期待される<sup>14</sup>。

#### 4. 2. メトニミーと社会文化的文脈

さて、言語には指示と述定という機能があり、一般にメトニミーは指示的な機能を果たすものとされてきた(Nunberg 1978、Fauconnier 1985 等)。しかし、メトニミーの具体的な事例を見ていくと、それらはアドホックに利用されているというよりも、積極的に選択されている場合も多いことに気づく。このとき、メトニミーは単なる短絡的な表現ではなく、メタファーと同様にカテゴリー化機能を果たしているといえる。以下、メトニミーを動機づける社会文化的な文脈を考えてみたい。

##### 4. 2. 1. 親愛表現とメトニミー

私たちの暮らす世界は均質な構成員で成り立っているのではなく、相手との力関係や親密度等が社会的な距離によって構造化されている。例えば、親しい家族や友人とその他の疎遠な人々は、内集団と外集団というかたちで自己にとって異質の集団とみなされる。このような社会的な関係は、呼称詞やあいさつ表現の選択等、言語にも反映される。例えば、日本語では会話の相手との社会的距離により「おれ」「ぼく」「わたし」等の呼称詞が使い分けられる(Brown and Ford 1964、鈴木 1973等)。

同様に、親密な関係にある人物をあだ名(ニックネーム)で呼ぶとき<sup>15</sup>、そのような社会的な関係が知覚されており、そういった観点から特定のあだ名が選択される(Kawakami 1996、谷口 2004: 165)。ここで注意すべきは、あだ名は相手の名前を知らないことによる便宜上の手段ではなく、親しみを込めた表現として、積極的に選択されたものであり、このとき相手の人物はそれらの表現によってカテゴリー化されているということである。

例えば、「のっぽさん」という体型に基づくメトニミーからは、のんびりした優しい印象が感じられるのに対して、「赤シャツ」という服装からはいかにも気取ったいやみな人間といった人物像が感じられる<sup>16</sup>。つまり、人物の体格や服装は、その人物に付属する単なる装飾物ではなく、その人物の内面(性格や人柄)を知る手立てとなる外見的特徴として利用される。ここでも見えない相手の内面を読むために心の理論が用いられていると考えられる。

同様に、商品の銘柄であるブランド名もカテゴリー化を反映する。例えば、「ベンツ」という会社名でそこで製造する自動車を、「ボルドー」という産地でそこで産出されるワインを指すとき、私たちはそういったブランド名を単なる短絡的な表現としてではなく、それらが持つ高級な銘柄という特徴を利用している。次に、メトニミーを禁忌される対象に対する言及を避けるために用いる婉曲表現について見てみよう。

##### 4. 2. 2. 禁忌表現とメトニミー

私たちの生活領域には、なるべく接触を避けたい、またことばにしたくないという事物や現象がある。例えば、私たちの日常的生活の一部である、排泄や性行為、また誰にでも訪れる病気や死等の経験は、心理的・文化的に共同体の成員にある種の嫌悪感を引き起こす。このことから、一般に、これらの事物や現象に触れること、さらにそういった現象について語ることが禁忌される。いわゆるタ



ブーと称される現象がある (Douglas 1966)。

ただし、禁忌すべき事物や行動はあまりに日常的であり、どうしてもそれらと接触、あるいはそれらに言及せざるを得ないという場合も多い。そのようなときにイメージや想像力をそらすために比喩的な表現が用いられる。例えば、トイレを *washroom* (御手洗) や *powder room* (化粧室) といったり、死や性に言及することを避けて、*return to earth* (土にかえる)、*sleep with someone* (誰かと寝る) といったりする (国弘1974)。

さらに、警察を「サツ」、麻薬を「ヤク」、搜索を「ガサ」というように音声的な省略表現を用いることで、隠語として周囲の人間の理解を妨げるという場合もある。さらに、シネクドキ (提喩) においても、上位概念で下位概念を言い換えることで表現を曖昧にすることがある。例えば、人の死を「不幸」、月経を「生理」、排泄行為を「用足し」と言い換える等、上位概念を用いることで直接の指示を避けている。

このような表現は、私たちの世界が社会的な関係や文化的な慣習によって構造化されているために発達した表現といえるだろう。したがって、このような場合は、メトニミーも単なる伝達上の短絡的表現ではなく、ある種の人間や行動を社会文化的に評価するために、また、反対にある現象に触れることを避けるために、ひとつのカテゴリー化の手段として用いられている。

最後に、メトニミーを語用論的な分野へ拡張する試みを概観する。

## 5. メトニミーと語用論的推論

認知言語学では、意味論と語用論は連続するものであるとし、メトニミー現象を語用論的な言語現象にも適用するようになってきている。語用論的現象のなかでメトニミーの観点から研究されている分野としては、間接発話行為 (Thornburg and Panther 1997、Stefanowitch 2000)、間接照応 (山梨 1991、2004、van Hoek 1997、高橋 2001、2004)、語用論的強化 (Traugott 1988、Traugott and König 1991) があるが、ここでは間接発話行為と間接照応現象を取り上げる。

### 5. 1. 間接発話行為

私たちはひとに窓を開けてもらうとき、「窓を開けてくれませんか」と依頼するかわりに、「ここは暑いですね」や「風が欲しいですね」等とあって、間接的に意図をほのめかすことがある。こういった現象は間接発話行為 (indirect speech act) として注目され、発話者の観点から会話の含意やポライトネスによる分析が行われてきた。また、解釈者の観点に立てば、発話者の意図をどう復元するかという問題となり、関連性理論等で語用論的推論の問題として考察されている。

間接発話行為は、一般にイディオム (Sadock 1972、Green 1975) や会話の公準 (Gordon and Lakoff 1971) といったかたちで捉えられるが、それらは発話行為の適切性条件を明示化することによって達成される<sup>17</sup>。例えば、依頼が成立する適切性条件としては、話し手が未来の状態を欲求する、聞き手が行為を実行する能力や意志を持つといった条件が挙げられる。以下は、これらの条件に言及することによる間接的な依頼表現である (山梨 1986: 89)。

- (24) a. I want you to take out the garbage.  
b. Can you take out the garbage?  
c. Will you take out the garbage?

こういった現象に対して、最近認知意味論の観点からふたたび脚光があてられている。Thornburg と Panther によれば、間接発話行為を保証するのは、語用論的推論ではなく依頼や約束等、発話行為が行なわれる典型的なシナリオであり、間接発話行為の成功は会話者がそれらの情報にアクセスできるかどうかにかかっているという (Thornburg and Panther 1997、Panther and Thornburg 2003)。シナリ



オは三つの局面の推移から構成される。

例えば、命令や依頼のシナリオは次のような局面で構成されている。

(25) Scenario for directive speech acts

- (i) BEFORE: H can do A  
S wants H to do A
- (ii) CORE: S puts under a (more or less strong) obligation to do A  
RESULT: H is under an obligation to do A (H must/should do A)
- (iii) AFTER: H will do A

これらは従来の適切性条件を時間的な局面推移のかたちで表現したもので、私たちは発話の理解においてこれらのシナリオを喚起し、このどこかの段階に言及することで全体的な行為をメトニミー的に指示することができる。このようなシナリオを喚起する表現として、次のような表現がある。このように依頼を段階的な行為とみなすことで、間接発話行為はメトニミー現象のひとつとして分析される (Stefanowitch 2003:115)。

- (26) a. BEFORE: Can you pass me the salt?  
I need/ want the salt.
- b. CORE: I am asking you to pass me the salt.  
Could I ask you to pass me the salt?
- RESULT: You must give me the salt.<sup>18</sup>
- c. AFTER: Will you pass me the salt.  
That's my salt.

また、こういったシナリオがつねに活性化されるようになると、もとの意味が漂白化 (bleach) することもある (Sweetser 1988)。例えば、*Can you ...?* や *Will you ...?* といった表現は、現在は質問よりも依頼として使用されることのほうが多い。これらは従来発話行為イディオム (speech act idioms) として分析されてきた現象であり、認知文法の観点からは用法基盤モデルによって動機づけられることになる<sup>19</sup>。

## 5. 2. 間接照応

人間の思考や言語は、情報処理における補完能力により支えられている。照応現象においても、先行詞と照応詞の間に直接的な繋がりが無い場合、その間の背景的な情報を補完することで自然な解釈が成立する。こういった間接照応に関わる推論は橋渡し推論 (bridging) と呼ばれ、スキーマやフレーム、スクリプト等の常識や知識構造を参照することで理解が達成されると考えられている (Haviland and Clark 1974)<sup>20</sup>。

例えば、次のような発話の理解はピクニックのスキーマによって説明される。(27a) では直接照応で容易に照応詞が決定されるが、(27b) では、The beer の照応詞が補完される必要がある。

- (27) a. We got some beer out of the trunk. *The beer* was warm.
- b. We checked picnic supplies. *The beer* was warm.

(Haviland and Clark 1974:514)

このときピクニックには弁当や菓子とともに飲み物も必要であるという知識が用いられることで橋渡し推論が達成される。この場合、ビールはピクニックに持っていく必需品ではないが、そのようなものもあってもよいというかたちでアドホックなカテゴリーが形成される (Barsalou 1983)。

同様に、このような橋渡し推論は、現在のフレームに相当する知識を働かせることで可能となるという主張もある (Sanford and Garrod 1981)。以下の文章の場合、最後の発話に The lawyer という表現

が用いられており、これがフレッドの弁護士であると理解されなければならない。

(28) Fred was being questioned.

He had been accused of murder.

The lawyer was trying to prove his innocence. (Sanford and Garrod 1981: 112)

このときに利用される知識は裁判のフレームであろう。Fillmore (1977) も指摘するとおり、裁判のフレームは blame、accuse、criticize といった動詞によって喚起され、その他にも、crime や criminal、judge や lawyer、defendant といった名詞によって補強される。ここでは accuse や crime の下位類である murder という表現が裁判の場面を喚起しており、その結果 The lawyer の自然な解釈が達成されている。また、次の例はもう少し複雑である (山梨 1992: 64)。

(29) 結婚して、一年分の野菜をつくって、[そのお金] を貯金するつもりなのか…。

⇒ [そのお金] = <野菜を作って売ったお金>

(林芙美子『女家族』)

この場合も直接的な照応詞がないため、読み手は主体的に「そのお金」がさす内容を <野菜を作って売ったお金> として推論しなければならない。このときに用いられる知識は農家の経営に関するスクリプトであろう。経営のスクリプトは販売と収入であるが、農業の場合は農作物の植付→収穫→販売→収入→…という行為連鎖が喚起される。こういった知識を利用することで初めて「そのお金」は野菜を販売して得た収入のことをさすと理解される<sup>21</sup>。

このように照応の解消 (橋渡し推論) には、フレームやスクリプト等の多様な知識構造が利用されるため、言語処理等の問題としても長く議論されてきた。コンピュータが言語の適切な解釈を行ない、人間と会話できるようになるためには、こういった知識を学習させるべきか、また、こういった推論機構を必要とするかといった問題へとつながり、現在でも活発に議論が続けられている (長尾真・佐藤理史・中野洋・黒橋禎夫 1998)。

## 6. おわりに

本稿では、第一に、メトニミー研究の歴史的経緯を概観し、近接性に基づく比喩という規定から、語用論的な指示の転移、さらに概念化あるいはカテゴリー化へと進み、現在の認知言語学では、参照点構造または領域焦点化として位置づけられていることを見てきた。第二に、メトニミーの経験的基盤を問い直し、そこに観察される意味拡張の方向性を示した。また、近年の心理学で脚光を浴びている心の理論との関連性についても触れた。第三に、メトニミーの使用の背景として知覚上のアクセス可能性を利用した短絡的指示であるとする見解と、メタファーと同様に積極的なカテゴリー化の反映であるとする見解の二つを検討した。最後に、メトニミーによる語用論的現象の分析例として、間接発話行為と間接照応という二つの現象を取り上げた。これらの議論からわかるのは、メトニミー現象は、現時点ではその定義から定説とされるものがないということであり、今後は、メトニミーの定義とその機能をさらに明確にしていくとともに、メトニミーを成り立たせている概念基盤やコミュニケーション基盤を問い直すといった総合的考察へと発展させていくことが期待される。

### 註

<sup>1</sup> このような同一の対象物に対する領域の焦点化という現象とコインの裏表の関係にある現象として、同一の領域内の焦点化の推移という言語現象がある (Sweetser 1999、西村 2002 等)。この現象は現在、フレーム・メトニミー (frame metonymy) として分析されている。

<sup>2</sup> 身体的な部位は次のような動植物の命名にも好んで用いられる。

【魚類】平目、目高 【鳥類】目白、頬白 【草花】背高草、…

<sup>3</sup> 人物の名前は属性によってつけられることが多い。例えば、マンガの主人公等はそういった属性を直接的に表わすものであり、『ドラえもん』の登場人物「のび太」「しずか」「スネ夫」「たけし」等はすべてその性質をもつてつけられた名前である。

<sup>4</sup> ピカソでゲルニカを指示することはあっても（例.ピカソを見た）、ゲルニカでピカソを指示することは考えにくい（例. ?ゲルニカに会った）。これは作者に対して作品数のほうが多いこととも関連があるかもしれない。

<sup>5</sup> スコープの問題は認知言語学では一般に活性化領域（active zone）の問題として議論される（Langacker 1988:200）。またスコープの取り方は日英語で異なることが知られている。例えば、英語の再帰形（‘-self’）と日本語の「自分」は次のように異なる分布をなし、日本語のほうがスコープをせまくとり、行為の対象を厳密に表わす傾向がある（廣瀬1997:83）

(i) John {washed, shaved, ...} himself.                      (ii) ?太郎は自分を{洗った、剃った、...}

<sup>6</sup> こういった関係を逆手にとった遊びとして、「大阪城はだれが建てたか」というなぞなぞがある。ふつうに考えると答えは「豊臣秀吉」となるのであるが正解は「大工さん」である（杉本2002）。

<sup>7</sup> 構文文法の観点からみると、音声の産出を表わす自動詞が移動を表わす構文に現れることで、その効果として移動の解釈が現れたということになるだろう。

<sup>8</sup> 目立つ動作として多様な表現が可能な場合もあり、運転の開始を表わすのに「ハンドルを握る」や「アクセルを踏む」等がある。

<sup>9</sup> また、これらの行為は文化的な慣習を背景にもつこともある。例えば、祈ることを表わす「手を合わせる」「膝を曲げる」といった行為はその宗教において特有の象徴的な祈りの形態に言及したものといえる。

<sup>10</sup> 漫画の絵画的な表現については手塚（1994）や竹内（2005）等を参照。

<sup>11</sup> 斎藤（1999）は、怒りの表現が戦後「ムカつく」から「キレル」へと変化する背景として腰肚文化の急速な衰退があると警鐘を鳴らしている。

<sup>12</sup> こういった状況依存性が最も顕著に現れた表現として、「ぼくはウナギだ」のようなウナギ文がある（奥津1978）。この場合も、料理の注文という場面が喚起されることで、はじめてぼくが注文した料理はウナギだという解釈が成立する。

<sup>13</sup> 状況的認知や分散認知については、Suchman（1987）、Hutchins（1990）、上野（1999）等を参照。

<sup>14</sup> 本多（2002）の「共同注意の統語論」等がまず研究の出発点となるだろう。

<sup>15</sup> 文化人類学等では大きく相手との社会的関係を冗談関係と禁忌関係に区分し、近距離の相手とは冗談が言える間柄として定義されている。

<sup>16</sup> 体格と性格が相関することについては Kretschmer（1921）を参照。

<sup>17</sup> 後者の二つは統語的にも *please* や *kindly* といった依頼に特化された副詞と共起することから、慣用的に依頼という発話の力を持つことがわかる。

<sup>18</sup> *You must give me the salt.* という表現は、その他の表現と比べて、日本語では幾分不自然ではないだろうか。このような点を考慮すると、言語化される局面の選択は文化的な制約を受けることが示唆される。

<sup>19</sup> 同様に、日本語の「ありがとう」という表現は語源的には「有難し」という事実を述べる表現であり、間接的に感謝の意が表わされている。これも感謝のシナリオとして事前の事実と言及することによる間接発話として説明される。

<sup>20</sup> 橋渡し推論に関する包括的な研究として Matsui（2000）が参考になる。

<sup>21</sup> 次のような会話でも「それ」が指す現象は明示的に述べられていない。この場合、聞き手は親戚の訪問というフレームを喚起し、「それ」が指す内容を「おばさん達が来る」ことと理解するのである（山梨1997:201）

甲：静岡のおばさん達、待ち遠しいなあ。

乙：じゃあ、[それ] までの玄関のお掃除を済ませましょうね。

## 引用文献

- Antonio Barcelona 2003. Clarifying and applying the notion of metaphor and metonymy within cognitive linguistics: An update. In René Dirven and Ralf Pörings (eds.) *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Barsalou, Lawrence W. 1983. Ad-hoc categories. *Memory & Cognition* 11: 211-27.
- Brown, Roger and Marguerite Ford 1964. Address in American English. In Dell Hymes (ed.) *Language in Culture and Society*. New York: Harper and Row, 234-244.
- Croft, William 1995. The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4): 335-370.
- Douglas, Mary 1966. *Purity and Danger: An Analysis of the Concepts of Pollution and Taboo*. London: Routledge & Kegan Paul PLC. (塚本利明 (訳) 2009. 『汚穢と禁忌』 筑摩書店.)
- Dean, Paul 1992. *Grammar in Mind and Brain: Explorations in Cognitive Syntax*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fauconnier, Gille 1985. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂原茂 (他訳) 1987. 『メンタル・スペース: 自然言語理解の認知インターフェイス』 白水社.)
- Fauconnier, Gille and Mark Turner 2002. *The Way We Think: Conceptual Blending and Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.
- Fillmore, Charles J. 1971. Verbs of judging: An exercise in semantic description. In Charles J. Fillmore and Terence D. Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 272-289.
- Fillmore, Charles J. 1982. Frame semantics. In the Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin Publishing, 111-138.
- 深田智・仲本康一郎 2008. 『概念化と意味の世界』 (認知言語学のフロンティア) 研究社.
- 藤田保幸 2000. 『国語引用構文の研究』 和泉書院.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff 2004. The resultatives as a family of constructions. *Language* 80: 532-568.
- Goossens, Louis 1990. Metaphoronymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. *Cognitive Linguistics* 1(3): 323-340.
- Gordon, David and George Lakoff 1971. Conversational postulates. *Papers from the 7<sup>th</sup> Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, 63-84.
- Green, Georgia M. 1975. How to get people to do things with words: The whimperative question. In Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press, 107-142.
- Haviland, Susan E. and Clark, Herbert H. 1974. What's new: Acquiring new information as a process in comprehension. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 13: 512-521.
- 樋口桂子 1995. 『イソップのレトリック: メタファーからメトニミーへ』 勁草書房.
- 廣瀬幸生 1997. 人を表すことばと照応. 中右実 (編) 『指示と照応と否定』 研究社, 1-89.
- 本多啓 2002. 共同注意の統語論. 山梨正明 (他編) 『認知言語学論考No.2』 ひつじ書房, 199-229.
- Hutchins, Edwin 1990. *Cognition in the Wild*. Cambridge: The MIT Press.
- Jacobson, Roman 1956. Two aspects of language and two types of aphasic disturbances. In Roman Jakobson and Morris Halle (eds.) *Fundamentals of Language*. The Hague: Mouton. (川本茂雄 (監訳) 1973. 『一般言語学』 みすず書房, 21-44.)
- José Ruiz, Francisco and de Mendoza Ibáñez 2003. The role of mappings and domains in understanding metonymy. In Antonio Barcelona (ed.) *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*. Berlin: Mouton de Gruyter, 109-132.
- Kawakami, Seisaku 1996. Metaphor and metonymy in Japanese nicknames. *Poetica* 46: 77-88.
- Kövescses, Zoltan 2000. *Metaphor and Emotion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kövescses, Zoltán 2002. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Kövescses, Zoltan and Günter Radden 1998. Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics* 9(1):

37-77.

子安増生 2000. 『心の理論: 心を読む心の科学』 岩波書店.

Kretschmer, Ernst 1921. *Körperbau und Charakter: Untersuchungen zum Konstitutionsproblem und zur Lehre von den Temperamenten*. Berlin: Springer. (内村祐之 (訳) 1982. 『天才の心理学』 岩波書店.)

国弘正雄 1974. 『アメリカ英語の婉曲表現 (上)』 ELEC出版部.

国広哲弥 1997. 『理想の国語辞典』 大修館書店.

楠見孝 1995. 『比喩の処理過程と意味構造』 風間書房.

Lakoff, George, and Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) 1986. 『レトリックと人生』 大修館書店.)

Lakoff, George and Mark Turner 1989. *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. 1990. Active zone. In Ronald W. Langacker 1990. *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter, 189-201.

Langacker, Ronald W. 1993. Reference point constructions. In Ronald W. Langacker 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter, 171-202.

Levin, Beth, Grace Song and Beth T. S. Atkins 1997. Making sense of corpus data: A case study of verbs of sound. *International Journal of Corpus Linguistics* 2(1): 23-64.

Matsuki, Keiko 1995. Metaphor of anger in Japanese. In John R. Taylor and Robert E. MacLaurey (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin: Mouton de Gruyter, 137-151.

Matsui, Tomoko 2000. Bridging and Relevance. Amsterdam: John Benjamins.

杉山洋介 1997. 慣用句の体系的分類: 隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に. 『国語国文学』 名古屋大学 80: 29-43.

杉山洋介 1998. 換喩と提喩: 諸説の整理・検討. 『日本語・日本文化論集』 (名古屋大学) 6: 59-81.

森山卓郎 2002. 『表現を味わうための日本語文法』 岩波書店.

森雄一 2003. 明示的提喩・換喩形式をめぐって. 山梨正明 (他編) 『認知言語学論考No.2』 ひつじ書房, 1-24.

長尾真・佐藤理史・中野洋・黒橋禎夫 1998. 『言語情報処理』 岩波書店.

西村義樹 1998. 行為者と使役構文. 中右実 (編) 『構文と事象構造』 研究社, 107-203.

西村義樹 2002. 換喩と文法現象. 西村義樹 (編) 『認知言語学 I: 事象構造』 東京大学出版会, 285-311.

Nunberg, Geoffrey 1978. *The Pragmatics of Reference*. Bloomington: The Indiana University Linguistics Club.

尾谷昌則 2005. 『自然言語に反映される認知能力のメカニズム: 参照点能力を中心に』 博士論文 (京都大学).

奥津敬一郎 1978. 『「ボクハ ウナギダ」の文法: ダとノ』 くろしお出版.

Palmer, Gary B. 1996. *Toward a Theory of Cultural Linguistics*. Austin: University of Texas Press.

Panther, Klaus-Uwe and Linda L. Thornburg 2003. Metonymies as natural inference and activation schema. In Klaus-Uwe Panther and Linda L. Thornburg (eds.) *Metonymy and Pragmatic Inferencing*. Amsterdam: John Benjamins, 127-147.

Piersman, Yves and Dirk Geeraerts 2006. Metonymy as prototypical category. *Cognitive Linguistics* 17(3): 269-316.

Pustejovsky, James 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge: The MIT Press.

Quine, Willard V. O. 1960. *Word and Object*. Cambridge: The MIT Press. (大出晃・宮館恵 (訳) 『ことばと対象』 勁草書房.)

Radden, Gunter and Zoltan Kövescses 1999. Toward a theory of metonymy. In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Metonymy in Language and Thought*. Amsterdam: John Benjamins, 17-59.

Sadock, Jerrold M. 1972. Speech acts idioms. *Papers from the 8th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, 329-339.

斎藤孝 1999. 『子どもたちはなぜキレるのか』 筑摩書房.



- Sanford, Anthony and Simon Garrod 1981. *Understanding Written Language: Exploration in Comprehension Beyond the Sentence*. Chichester: John Wiley.
- 瀬戸賢一 1997. 意味のレトリック. 巻下吉夫・瀬戸賢一 (編)『文化と発想とレトリック』研究社, 93-183.
- 篠原俊吾 1994. 換喩発生の認知プロセス. 『実践英文学』(実践女子大学) 45: 15-29.
- 篠原俊吾 1997. 形容詞・行為・責任. 『教養論叢』(慶應義塾大学) 106: 43-59.
- Stefanowitsch, Anatol 2003. A construction-based approach to indirect speech acts. In Klaus-Uwe Panther and Linda L. Thornburg (eds.) *Metonymy and Pragmatic Inferencing*. Amsterdam: John Benjamins, 105-26.
- Stern, Gustaf. 1931. *Meaning and Change of Meaning: With Special Reference to the English Language*. Westport: Greenwood.
- Suchman, Lucy A. 1987. *Plans and Situated Actions*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖 (監訳) 1999.『プランと状況的行為』産業図書.)
- 杉本孝司 2002. なぞなぞの舞台裏: その理解と認知能力. 大堀壽夫 (編)『認知言語学Ⅱ: カテゴリー化』東京大学出版会, 59-78.
- 鈴木孝夫 1973.『ことばと文化』岩波書店.
- Sweetser, Eve E. 1988. Grammaticalization and Semantic Bleaching. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 14: 389-405.
- Sweetser, Eve E. 1999. Compositionality and blending: Semantic composition in a cognitively realistic framework. In Theo Janssen and Gisela Redeker (eds.), *Cognitive Linguistics: Foundation, Scope, and Methodology*. Berlin: Mouton de Gruyter, 129-162.
- 高橋英光 2001. 英語の間接照応. 山梨正明 (他編)『認知言語学論考 No.1』ひつじ書房, 111-141.
- 竹内オサム 2005.『マンガ表現学入門』筑摩書房.
- 谷口一美 2003.『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』研究社.
- 手塚治虫 1994.『マンガの心: 発想とテクニック』光文社.
- Thornburg, Linda L. and Klaus-Uwe Panther 1997. Speech acts metonymy. In Wolf-Andreas Liebert, Gisela Redeker and Linda Waugh (eds.) *Discourse and Perspective in Cognitive Linguistics*, Amsterdam: Johns Benjamins, 203-219.
- 角田太作 1992.『世界の言語と日本語』くろしお出版.
- Uehara, Satoshi 1998. *Syntactic Categories in Japanese: A Cognitive and Typological Introduction*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- 上野直樹 1999.『仕事の中での学習: 状況論的アプローチ』東京大学出版会.
- Ullmann, Stephen 1959. *The Principles of Semantics*. Oxford: Blackwell. (山口秀夫 (訳) 1964.『意味論』紀伊国屋書店.)
- Van Hoek, Karen 1997. *Anaphora and Conceptual Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Wierzbicka, Anna 1986. What's in a noun? (or how do nouns differ in meaning from adjectives?) *Studies in Language* 10: 339-353.
- 山梨正明 1986.『発話行為』(新英文法選書)大修館書店.
- 山梨正明 1988.『比喩と理解』(認知科学選書)東京大学出版会.
- 山梨正明 1992.『推論と照応』くろしお出版.
- 山梨正明 1997. 創造性と言葉のエコロジー: 対話環境と推論の問題を中心に.『環境としての自然・社会・文化』京都大学学術出版会, 195-220.
- 山梨正明 2004.『ことばの認知空間』開拓社.